

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第14回環境教育ワーキンググループ議事要旨

日時：2015年2月5日（木）10:00～11:30

場所：釧路地方合同庁舎 4階第3会議室

【出席者(敬称略)】

<個人> (出席者 50音順)

- ・新庄 久志
- ・高橋 忠一
- ・鶴間 秀典

<団体>

- ・釧路国際ウェットランドセンター・釧路湿原国立公園連絡協議会 菊地 義勝
- ・釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会 鈴木 久枝、中嶋 忠雄
- ・こどもエコクラブくしろ 近藤 一燈美
- ・NPO 法人釧路湿原やちの会 岩間 喜美子

<教育行政関係機関>

- ・釧路市教育委員会 富田 義宏
- ・釧路町教育委員会 佐藤 一浩
- ・標茶町教育委員会 佐々木 豊
- ・北海道教育庁釧路教育局 清水 秀紀

<関係行政機関>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 西山 理行
- ・国土交通省北海道開発局釧路開発建設部治水課 市川 嘉輝、大田 義博
- ・林野庁北海道森林管理局
釧路湿原森林ふれあい推進センター 網倉 和弘、重光 秀人、高見沢 敏男
- ・釧路市 菊地 義勝

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所
国立公園・保全整備課 杉本 頼優
釧路湿原自然保護官事務所 渡邊 雄児
- ・公益財団法人北海道環境財団 久保田 学、山本 泰志、安田 智子

【議事概要】

事務局 第14回環境教育ワーキンググループ（以下「環境教育WGと表記」）を開催する。

（配布資料確認）

参加委員に訂正がある。林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林ふれあい推進センターより、網倉委員に加え、重光委員、高見沢委員にご参加いただいている。以降の進行を高橋座長にお願いする。

議事1 2014年度環境教育WGの取り組み内容について

（以下、高橋座長による進行）

高橋座長 議事1について事務局より説明をお願いしたい。

事務局 資料1、参考資料1、参考資料2、参考資料3に基づき説明。

高橋座長 感想やご意見をいただきたい。

近藤委員 温根内で感じるのは、ビジターセンターを訪れてくる学校が、限定された学校になってきているということである。自身の知っている範囲では、鶴居小学校、鶴野小学校、富原小学校などで、その他の学校については、学年単位で訪れる学校は最近少なくなっている。移動手段の問題であろう。釧路市内からであれば、移動費の負担も大きくなる。鶴野小学校では路線バス沿線に学校があることもあり、定期路線バスを利用している。バス会社に依頼すれば増車してくれると聞いており、移動手段の確保についても、実施している学校では、先生方が工夫されている。

高橋座長 北海道教育大学釧路校の境先生の授業実践については、非常に興味深いもので、個々の授業の指導案などを含めると資料は膨大になる。1つの教材を開発するには、学習指導要領と現実の地域の自然や問題とを結びつけていくことが必要で、非常に高い専門性が必要とされるという印象を持った。今年度については、流域圏の全ての学校を対象として実施しているわけではなく、鶴居小学校、下幌呂小学校、北海道教育大学附属釧路校で行ったということであるが、少しずつ効果があがってくればよいと感じる。

富田委員 境先生の実践については教科書が中心であり、教科書の中の題材が地域にあることを先生が知れば無理なく活用していくことができる。昨年まで作成を行ってきた湿原の生態系などの学習素材についても学校にPRするようにしているが、アンケート結果を拝見して、まだ浸透していない部分もあると感じた。ただ、先生方によっては、使ってくれている。

高橋座長 モデル授業については、境先生は毎年一つずつ対象単元を増やしていくことを考えておられるのか？

事務局 今後の検討の中でとなるが、まずは、今年度開発されたモデル授業の質を高め、内容を改善していければと境先生からはお聞きしている。

高橋座長 地層と釧路湿原が教科書の中でどのようにつながるのか、私達にはわからないが、こうして出来上がったものを拝見すると、巧みにつながっている。テーマも別のものがあると良い。

佐藤委員 ワーキンググループの会合に参加するのは2年ぶりだが、昨年、一昨年と作成された教材はすばらしいと感じ、釧路町の教頭会議で活用を検討いただけるようにお話しした。学校にどのように伝わっているか把握できていないが、アンケートの結果を見ると、意外と先生達に知られていないことがわかった。もっと先生方に知ってもらわなければならない。また、境先生は釧路町内の学校に来ていただき講習などでも実施いただいているので、この教材を活用した授業の研修なども検討していければと思う。先生がこの教材を見れば、授業で使えると感じるはずである。

清水委員 教科書だけではなく様々な学習の中で、児童と湿原の距離を近づけていくことが必要と感じている。指導する先生に有益なコンテンツがあることを今後一層PRしていくことが必要であろう。

高橋座長 環境教育 WG を 7 年間やってきて感じることの 1 つとして、学校教育の関係者がこの場になかなか入っていただけないが、そうした方々がやはり必要であるということである。そうした部分をこれからの課題として考えてみたい。

佐々木委員 今回初めて参加した。今年度 4 月から標茶町教育委員会に勤務しているが、それまで釧路市内で理科の研究会にも所属していた。標茶町では、釧路川の流域にあるということで、体験的な活動を総合的な学習の時間の中で行っている学校もある。限られた時間の範囲ではあるが、地域の方に協力いただいて釧路川のことを学習している学校や、学校林について植樹などの体験等を行っている学校もある。7 年間の時間経過を踏まえて言えば、長年理科を担当してきたが、毎年の理科の研究授業や研究発表の中身を見ると、室内で行う教材研究は充実してきているが、フィールドをテーマとしたものは非常に少なくなっているという事実がある。現場の意識の中で、自然との関わりの大切さはわかっているが、物理的にフィールドに出て行くことや、自然を勉強しながら新たに教材を作らなければならないということは、7 年前よりも状況は厳しくなっていると感じる。また、教科書の内容をしっかりと教えなければならないという現場の状況もあり、自主的にフィールドの中から教材を開発し、地域に合ったものを子どもに提供しようという意識はあるが、なかなかそこまで踏み出せない状況がある。それらを踏まえた上で、どのように学校にフィールドワークを導入していくかが次の課題になる。

高橋座長 私たちも総合的な学習の時間での活用を前提に考えてきたが、フィールドワークには移動や時間確保などの課題もあることから、理科や社会などの教科学習への組み込みの重要性を考えてきた。

佐々木委員 時間的なことは確かに大きい。教科書に載っていることを丁寧に教えていこうという空気が現場にはあり、教科書の内容と日常をじっくりつないでいく余裕を教員が持てない状況にある。こうした状況は以前よりも増してきているように感じる。以前に釧路市にいた時には、フィールド学習では「まずは温根内に行こう」という雰囲気があったが、年 1 回しか行けないフィールドよりは、身近な場所で教材を開発しようという意識に変わってきていると思う。これは釧路市内の場合で、標茶町など、湿原に近い学校についてはやり方はあるかと思う。

高橋座長 教員研修のアンケートを見ると、参加することで先生達の認識の変化がみられるが、先生全体の中ではまだ一部にとどまっているということか。

事務局 これまでの教員研修には 80 人の先生が参加した。意識はしていても、担当学年、学校のカリキュラム等々、実践を行うことは容易ではないということが先生の意見から伺える。しかし、機会があった時にそれを活用できるよう、地道に続けることが必要だと認識している。

網倉委員 釧路湿原森林ふれあい推進センターで森林環境教育を実施している学校は減ってきている。要因の一つとして、学校の統廃合の問題があり、それまで取り組んできた学校であっても統廃合により実践が途切れてしまう。また、こちらで必要な準備は行うことを提案しても、関心が薄い先生では、なかなか実践に結びつかない。移手段の問題もあるかと思うが、学校に出向いていくことを提案しているが、実践に結びつかない難しい状況にある。

中嶋委員 今回初めて出席するのでわからない部分があるが、湿原をテーマに環境教育を取り入れるのは、先生次第と言うことか。学校の方針や教育委員会の指導要領はどのようになっているのか？今の意見から読み取れば、先生次第ということであるが。

高橋座長 様々な要因が複合的に影響している。先生の興味や意識もかなり影響するであろうが、学校や教育委員会の方針も影響するであろう。方針に沿う形で早い時期に計画が立てられ、その中で複数のテーマから選択する機会がある場合には、先生個人の関心や意識が効いてくるということであろう。

富田委員 教育委員会から環境教育を学校の中で位置づけるといった方針は出してはいない。学校の

カリキュラムの中で先生方が無理なくこういった湿原を題材とした学習資料等を使っていくにはどうしたらよいか考えていくことであろう。

新庄委員 7年間の取り組みの成果はそれなりにあった。教員へのアプローチの重要性が把握できたことから、教員研修を続けていくことが必要であり、価値があるということがわかった。また、境先生の実践からわかるように、私たちが作った学習素材を使って教科単元の中で教材化していただいている。私たちは学校の教科の内容を把握し、この単元には湿原のこの要素が使えるといった提案をしていく作業を引き続き行っていくことが重要であるということが成果としてわかったということであろう。最後に、子ども達にどのようにアプローチするかという点では、学校教育の中で総合的な学習の時間などを使ってフィールドに出て行くということは非常に難しいということもよくわかった。児童、生徒に関しては、別のアプローチを考えなければならない。例えば、課外活動を生かして環境教育に展開している例も増えてきている。国内、先進国に限らず、学校教育の中でフィールド活動を行うことは非常に難しくなっている。学校教育で教えなければならないことは非常に多くなってきているため、インターネットなどを用い、仮想の体験で置き換える形で学校では展開しようとしている。実際のフィールドについては、学校教育が終わった課外活動で、地域の人たちの協力を得て行うという動きもある。このように、児童、生徒については、そうした別の観点からのアプローチが必要であるということが、7年間の活動で学んだのではないか。これらが明らかになってきたということは7年間の非常に大きな成果であろう。

高橋座長 気がついたことが一つでもあるということは重要である。課題や可能性を把握することで、別の道を検討していくきっかけにつながる。

議事2 再生普及行動計画の見直しに伴う体制の変更について

高橋座長 議事2について事務局より説明をお願いしたい。

事務局 資料2、資料3に基づき説明。

高橋座長 環境教育WGは、再生普及小委員会に設置された2つのワーキンググループの1つである。ワーキンググループであるため、課題がある時に立ち上げ、ある程度課題解決が成されれば解散するという予定で設置されていた。これまで、14回の会議を重ねてきたが、その総括について報告があった。3月に予定している釧路湿原自然再生協議会において、釧路湿原自然再生全体構想の見直しを踏まえて新たな体制を協議する。また、第3期再生普及行動計画では、環境教育に特化した項立てが盛り込まれることとなる。これらの大きな枠組みの中で、現在のワーキンググループは再生普及小委員会にその役割を移し、環境教育WGはその役割を終え解散することとなる。次年度には、より専門性の高いワーキンググループを新たに立ち上げ、より学校教育に近いメンバーに集まっていたら、教材開発や教員研修の企画等を担っていくという構想である。これについてご意見をいただきたい。

佐々木委員 現行の環境教育WGは、学校教育の中で環境教育をどのように位置づけていくかということに重点をおいてきたものか？

高橋座長 ワーキンググループを立ち上げた時には、学校教育に限定したものではなく、社会教育も含めた環境教育を検討していくということであった。まずは学校教育にフォーカスを当てて取り組みを始め7年間やってきたという経緯になる。結果的に、学校教育における環境教育を考えるということが主になってきている。

佐々木委員 次のワーキンググループでは学校教育支援とのことだが、さらに学校ということが強調されている。学校ということ考えた時に、環境教育に関して期待する支援というものはどうい

ものであろうか。学校教育で求めていることと、ワーキンググループでやりたいことのマッチングはどこで行われるのであろうか。学校という形で絞り込んだ後、学校で最終的に成果を上げることが期待されとなれば、学校にとっては荷が重いものになってしまうのではないか。学校とワーキンググループでのしっかりしたすりあわせが重要になる。

鈴木委員 先生や児童と一緒にやってきても、先生の転勤や児童の卒業で実践がなくなってしまう。

新庄委員 それで良いと考えている。子ども達は経験して大人になっていく。その過程で私達はアプローチしているため、その経験や知識は残っていく。先生についても釧路で着任し経験したことを他の学校で生かしていただける。それで十分である。私達は特定の学校の湿原学習を盛んにすることを考えているわけではない。そうでなければ、現在の教育制度とぶつかってしまう。成果の捉え方はそのように考えなければならない。学校教育現場とのすりあわせは本当に考えていかなければならない。次のワーキンググループを「湿原学習のための学校支援」と謳っており、略称を「学校支援」としているが、よくよく考えるとつらいように感じる。「学校教育のための学習支援」であれば、学校の中で湿原学習を行う場合に支援するという形で私たちにもできるかもしれない。学校教育の体制はこれからも変わり続けていくであろうが、それに併せて支援を継続していくのは、釧路湿原自然再生協議会が設置するワーキンググループのあり方としては辛くなってくるのではないか。教育委員会やPTAの中の組織であれば、そうした役割もあり、それを担う組織もあるであろうが、私達の活動はNGO的なものが多いことから、できることを考えなければならない。

高橋座長 個人的な意見も含めて、こうした組織を変更するといった際に、話し合いの中でそれぞれがイメージを持つことはできるが、1つの言葉にする時に非常に難しい場面が多い。端的に言えば、名称を的確に決めるということはそれ自体が非常に難しいものである。お互いの関係の中で、求められることを手伝うことと、相手に働きかけることの双方をこれまで行ってきた。声がかかるのを待っているだけでは進まないが、出かけて行って働きかけることにも限界がある。その難しさの中で、手探りでこれまで進めてきた。新たな体制でも、スタートに当たってそうした方向性やどの範囲で動くかを、厳密に議論する必要がある。ただ、これまで関心のなかった先生が興味を持ってくれば、そうした先生を一人ずつでも増やしていければ、他の学校に異動になっても無駄にはならないだろう。長い時間にわたってそうした取り組みを続けていくことで、次第に認識が広がっていき、実践を行おうという学校が生まれてくるということを目指していくことで良いと感じる。

新庄委員 次のワーキンググループで先生方に入ってもらい進めていくということは、まさにそうした部分であろう。学校の先生がどのような教材をどう活用するのかを私達は知りたい。それに対して、これを使って下さい、と提案すればよい。そのために学校の先生方と一緒に考えることが必要。教科を教えるにあたって、先生は教材を必要としているはずであり、今のところ、市販の教材や指導要領に準じた教材を手に入れて、教材を作られている。そこに私たちが湿原の教材をセールスする。これが次のアプローチではないか。資料2、5ページに記載されている『①先導的な授業実践や教材作成、②教員への研修機会の提供、③学校と国立公園利用施設、社会教育施設や地域のNPO、事業者、専門家との連携支援等を進めるプロジェクト実行委員会的な役割を担う』はそのことを示している。これまでの環境教育WGの取り組みを、学校教育に特化して立ち上げていくという意識であろうと受け止めている。

高橋座長 釧路湿原自然再生全体構想のサブタイトルである「未来の子どもたちのために」はなくなることはない。これが、湿原について私たちが取り組んでいく根本にある。学校とは限らないが、子ども達が学ぶ場所と絶えずつながりを持ち続ける必要があると考えている。

新庄委員 湿原のフィールドを使って下さいというアプローチでは駄目だということが7年間の取り組みで学んだことであろう。フィールドプログラム、講師、場所、移動手段等をセットで提案し

ていくことの限界もある。これまでの要素を分解し、切り売りして売り込む、ということが次のステップではないか。

清水委員 社会教育の立場だが、行政の自前主義からの脱却を求められている。例えば公民館職員が事業を起こそうということ考えた時に、職員の知識や技量の範囲だけではなく、外部との連携の中で自分が扱える以上のことを提供することが求められている。学校も同様であろう。湿原のことを学ばせたいと先生が思っても、知見がなければ、現状では授業では教えられない。ワーキンググループでは、やりたいけどやれない人にアプローチできるとよい。例えば4月に学校に湿原学習をお手伝いする、というチラシを撒くなどすればよい。意思のある先生に対して、教材を提供する、必要な支援を行うというスタンスを持てば、学校も受け入れられるのではないだろうか。理科の実験教材は業者が教材を開発して学校に持って行くが、湿原を学ぼうとする時に、そうした教材はない。そういったアプローチもあるだろう。

佐藤委員 釧路町に限れば学校支援地域本部事業が盛んに行われている。地域からの提案について、学校で使えそうなものは活用される。湿原についても、そのように位置づけられれば、学校としても利用しやすいのではないか。

新庄委員 私たちは学校の単元で先生達がどのように教えているかを知らない。それがわかれば提案することができる。これからのステップとしてはそれが重要であろう。

高橋座長 新たなワーキンググループに関しても、教育委員会の方へ様々なご協力をお願いすることになるであろうが、よろしく願いたい。ワーキンググループの名称についても検討を要する。まだ検討していくことは可能か。

事務局 可能である。この場でも様々なご意見をいただければと考えていた。

高橋座長 名称については検討することとするが、いずれにしても、学校での子ども達への湿原学習をお手伝いするワーキンググループを何らかの形で進めることになる。

岩間委員 これまで会合に出席できていなかったが状況はわかった。ガイドの活動を行う中で、小さい頃から湿原のことを知る機会があれば、私たちの年になった時にもっと変わったものになると思う。学校で様々なものを抱え込むと大変であるという印象を持ったが、一緒に取り組んでももらえたらと思う。学校からの依頼に対して、会としてその分野を引き受けさせてもらうということもできるのではないかと感じた。

市川委員 治水課では河川に限定されるが、調査結果を提供することはできる。

高橋座長 学校と連携した実績などはお持ちか。

市川委員 様々な仕掛けはしてきたが、先生方もお忙しいという状況もあり多くはできていない。出前講座をお手伝いすることもできる。釧路町の遠矢小学校では植樹が19年程続いており、一旦学校に根づけば活動は続くものだと思う。

新庄委員 このままだと同じことになるのではないか。私達は出前講座の用意があるので声をかけて下さいと言っている。学校でも関心のある先生もいて、実践につながる場合は、講師や教材、プログラムもほしい。お互いに待っているのはこれまでと同じで、先生には使っていただけない。今必要とされているのは、学校教育の中でどのようなニーズがあるのかを知り、何を使っていただけるのかを明らかにすること。先生方と話し合えばそれがわかるであろう。境先生の地層の学習ではそれがわかった。そのように、他の教科についても、もう一步踏み込まねばならない。そうしなければ、次のステップとして学校教育とつながることは難しくなる。そこを明確にしなければ、これまでの環境教育WGと同様になってしまうことを危惧している。先生方は個人で湿原学習をセットしたり、教材を用意したりすることなどできない。例えば、学校から堆積岩について教えたいというニーズがあった時に湿原に関する地層を紹介する、等の具体的なニーズとのマッチングこそが必要になる。

高橋座長 学校教育は普遍的な部分はあるが、一方で地域ごとに生活の中の知恵やローカルな思想があり、それが各地域の真実でもある。釧路湿原も釧路地域の中の一つの真実であり、それがどのような形で教育に入るべきなのか、私達だけではなく教育委員会の方や学校の先生からご意見をいただきながら、進めていかなくてはならない。心配な部分はつきないが、そこからでなければスタートはきれないものと考えている。

西山委員 まさにそのようなことを話し合っ具体的詰めていくものが新たなワーキンググループと考えている。教育委員会の方や先生など、当事者が顔を合わせる場である。協議会として学校教育に貢献したいという気持ちは現在も、これからも変わるものではない。これまではピンポイントでは需要と供給が合致していない部分も見受けられるので、次のステージでは、直接の当事者が集まって、お互いのニーズがマッチしない部分を当事者で詰めていく場になると理解している。

高橋座長 いただいたご意見を踏まえて、次のステップを進めていきたい。時間になったため、議論を終えたいと思うが、7年間お付き合いいただいた委員の皆様へ感謝申し上げたい。

西山委員 7年間にわたり、環境教育WGにご参加いただき、お礼申し上げます。これまでの現地での経験や本省の自然ふれあい推進室に居たときの経験からも、環境省や事業実施官庁だけで自然学習や生物多様性に関する普及啓発を行っていくには限界があることを痛感してきた。学校教育と直接的に結びつけることが出来れば可能性が広がると考えてきた。このワーキンググループは「環境教育WG」という名称であるが、本日の話にも出たように、まずは「学校教育」が重要・優先との共通認識で進んできたものと思う。このワーキンググループとしては解散となり、体制は新しいものとなるが、再生普及小委員会という形は変わらないし、ここにお集まりの皆様には引き続き一緒に考え、行動していただけたらと思う。7年間お疲れ様でした。改めて感謝申し上げたい。

高橋座長 進行を事務局にお戻しする。

事務局 以上で第14回環境教育WGを閉会する。